

■ 論 文

中国都市部における若者の幸福度の影響因子に関する研究

王 文強*、豊田 祐輔**

【要旨】

都市の発展度や生活環境、所得、健康状態などが幸福感に影響を与える。また、一般的に幸福感は「U」字型に変化し、青年期と老年期に高まり、中年期に低下する傾向がある。しかし、2018年の世界価値観調査では、中国の若者の幸福度が最低という結果が報告された。先行研究で幸福度は経済的満足や健康、生活環境に左右されると示されているが、中国特有の社会構造を考慮した分析は不足している。本研究は、中国の若者の幸福度に影響を与える要因を明らかにするため、都市部の若者を対象にウェブアンケートを実施し、回帰分析や構造方程式モデリングを用いて分析を行った。まず、高所得地域と低所得地域の比較分析により、幸福度に影響を及ぼす要因に明確な違いが確認された。さらに、経済、健康、生活環境、仕事要因が幸福度に有意な影響を与えることが確認された。特に経済的要因と仕事要因が幸福度に最も強い影響を及ぼしていることだけでなく、健康は幸福度に対して直接的な影響に加えて、他の要因を介して重要な役割を果たしていることを示した。

キーワード：幸福度、若者、中国都市部

I. はじめに

I. 1 幸福度の定義

幸福度（主観的幸福感 [Subjective Well-Being : SWB]）とは、個人が自身の生活について評価する主観的な指標である。具体的には、感情的反応、満足度の評価、そして生活の質に対する認知的評価という三つの側面で構成される複雑な概念である (Diener, Oishi, & Lucas, 2003)。政策科学の分野では、幸福度研究を基に公共政策の設計や社会資源の再分配を通じて、社会福祉を向上させることが注目されている。政策科学の視点から見れば、幸福度は個人の満足度だけではなく、社会全体の持続可能な発展に寄与するための重要な指標であると言える。また、多くの研究では、幸福感はライフステージに応じて変化し一般的には「U字型曲線」を描く傾向があると報告されている (Blanchflower & Graham, 2020)。具体的には、若年期と老年期に幸福感が高く、中年期でやや低下することが多い。しかし、近年の中国における若者の幸福感低下は、このU字型幸福曲線と異なる動きを示す例外的現象として注目されている (田柳ら、2024)。この背景として、急速な社会変化や経済的プレッシャー、社会的期待の変化が背景にあると考えられる。

* 立命館大学大学院政策科学研究科 博士課程前期課程

** 立命館大学政策科学部 准教授

I. 2 世界価値観調査による中国における若者の幸福度の先行調査

I. 2. 1 世界価値観調査の概要：目的と意義

世界価値観調査（World Values Survey：WVS）は、異なる国や地域の人々の価値観や文化的背景、主観的幸福感などを詳細に調査するグローバルプロジェクトである。2022年に発表されたWVSは、中国における社会的、文化的、経済的背景が人々の価値観や行動に与える影響を明らかにすることを目的として実施された。なお、2022年版の調査における実際のデータ収集は2018年に行われている。本稿における先行調査では、2018年に収集されたWVSデータを中心に用い、中国の若年層（18-29歳）を対象とした幸福度の特徴を把握し、その要因を分析することを目的とした。WVSデータを基に、中国の若者の幸福感の影響因子はどのようなものなのかを明らかにするとともに、その課題を提示する。

I. 2. 2 世界価値観調査に基づいた中国における若者の幸福度に影響を与える要因

WVS（2022年版）によれば、「Q46 幸福度」に対する回答の集計では、29歳以下の若者年齢層の幸福度が一番低い（表1）。これは、一般的に想定されるU字型曲線を描いておらず、特に29歳以下の若年層で幸福度が著しく低い傾向が確認された。

表1：WVSによる幸福度に関する回答の集計

	年齢		
	29歳以下 N=679	30-49歳 N=1348	50歳以上 N=1010
非常に幸福	22.9%	24.5%	34.4%
やや幸福	64.3%	64.6%	55.5%
あまり幸福ではない	10.7%	9.4%	8.9%
全然幸福ではない	2.0%	1.5%	1.1%
回答なし	0.0%	0.0%	0.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

出典：世界価値観調査（2022）より筆者作成

本先行調査では、中国における若者の幸福感低下という現象の背後にある主要な要因を明らかにするため、より詳細な分析を実施した。まず、データの有効性を確認するために、調査アンケートの質問91「国連安全保障理事会の常任理事国は5カ国あるが、その中に含まれていない国はどれか？ 1- フランス 2- 中国 3- インド」を判別質問として設定し、「3- インド」と回答したデータのみを有効データとしてスクリーニングした。その結果、最終的に2,173件の有効データが得られ、そのうち18～29歳の若者に該当するデータは474

件であった。

次に、幸福度に影響を与える要因の特定に関して先行研究を参考にした。例えば、Wang (2023) の研究では、収入、婚姻関係、身体的健康が主観的幸福感に与える影響が明らかにされている。さらに、Tang (2022) の研究では、政府満足度や宗教が幸福度と関連していることが示されている。佐藤 (2021) の研究では、子どもの人数が幸福感に与える影響が分析され、子どもの数が増えるほど幸福感が低下する傾向が確認された。また、Peiró (2008) の研究では、雇用不安感が心理的ストレスや生活満足度に有意な影響を及ぼすことが示されている。これらの先行研究を基に、幸福度に影響を与える可能性のある複数の変数を抽出し（表 2）、線型回帰分析によってそれらが幸福感に及ぼす影響の大きさを測定した（表 3）。

表 2：主要変数の説明

		変数	内容
被説明変数		Q46: 幸福度	全く幸福ではない=1、あまり幸福ではない=2、やや幸福=3、とても幸福=4
説明変数	健康要因	Q47: 健康レベル	1=とても不健康、2=やや不健、3=普通、4=やや健康、5=とても健康
	経済要因	Q50: 家庭収入満足度	1 から 10 まで 全く満足ではない=1, とても満足=10
	個人要素	Q273: 婚姻関係	1=既婚/配偶者有り、2=独身
		Q274: 子どもの人数	0=0 人、1=1 人、2=2 、3=3 人
		Q164: 宗教信仰重視度	1 から 10 まで 全く重要ではない=1, とても重要=10
		Q252: 政府満足度	1 から 10 まで 全く満足ではない=1, とても満足=10
		Q142: 失業や就職失敗への不安の程度	1=とても心配、2=やや心配、3=あまり心配ではない、4=全く心配ではない

表 3 : WVS 影響要因の回帰分析結果（若者対象）（ $n=474$ ）

	標準係数	t	p	共分散診断	
	$Beta$			VIF	許容範囲
Q47: 健康レベル	0.183	4.169	0.000**	1.056	0.947
Q50: 家庭収入満足度	0.225	4.987	0.000**	1.120	0.893
Q142: 失業や就職の失敗に対する不安の程度	0.024	0.564	0.573	1.019	0.981
Q164: 宗教信仰重視度	0.046	1.070	0.285	1.015	0.985
Q252: 政府満足度	0.139	3.127	0.002**	1.086	0.921
Q273: 婚姻関係	-0.084	-1.451	0.147	1.834	0.545
Q274: 子供の人数	0.032	0.559	0.577	1.846	0.542
R^2			0.151		
調整済 R^2			0.138		
F		$F(7, 466)=11.795, p=0.000$			
D-W 値			1.906		

備考：従属変数＝Q46：幸福度、* $p<0.05$ 、** $p<0.01$

本分析の結果、健康レベル、家庭収入満足度および政府満足度が幸福度に有意な正の影響を持っていることが示された。回帰モデルを簡単に式で表すと、下記のようなになる。

$$\text{幸福度} = 1.935 + 0.183 * \text{健康レベル} + 0.225 * \text{家庭収入満足度} + 0.139 * \text{政府満足度}$$

この中で、健康レベル（Q47）の標準化回帰係数は 0.183 であり、健康状態が若者の幸福感に対して正の影響を持つことが示唆された。家庭収入満足度（Q50）の標準化回帰係数は 0.225 であり、経済的要因が幸福感に寄与する重要な要素となっている。政府満足度（Q252）も標準化回帰係数が 0.139 となり、政府への信頼感が幸福度を高める要因であることが明らかになった。

これらの知見から、健康状態、家庭収入満足度、および政府への満足度が、中国の若者の幸福感を構成する主要な要因であると考えられる。しかし、幸福度は単一の要因では説明できない多面的な構造を持っている。経済的側面や健康的側面だけでは、個人の幸福感を十分に高めることは難しい可能性がある。中国の若者が直面している現在の社会問題を分析し、その中で幸福度に影響する要素を探ることが重要である。中国国家統計局（2023）や中国国民心理健康発展報告（2021-2022）によれば、中国社会は現在、経済格差や心理健康などの社会的側面の問題に直面している。

I. 3 現在の中国における格差問題について

I. 3. 1 経済格差問題

中国では急速な経済成長が達成される一方で、所得格差が深刻な社会問題として浮上している。図1のように、近年、中国のジニ係数が高まっていることが分かる。中国国家統計局（2023）のデータによると、2023年のジニ係数は0.47に達しており、世界ランキング44位である。これは国際的基準で「比較的深刻な格差」に分類される（NBS, 2023）。ジニ係数が0.4以上は深刻な格差とされる。この格差は個人の消費能力や生活満足度に大きな影響を及ぼしており、特に低所得層における心理的ストレスの増加や生活の質の低下が指摘されている（近藤、2021）。

また呉（2018）によると、家庭収入の不平等は、若者の教育機会や就職など成長の公平性にも影響を及ぼすため、社会全体の持続可能な発展に対する潜在的なリスクとなっている。本研究では、現在の経済的環境を踏まえた上で経済的要因が若者の幸福感に与える影響を明らかにするため、詳細な分析を行う。

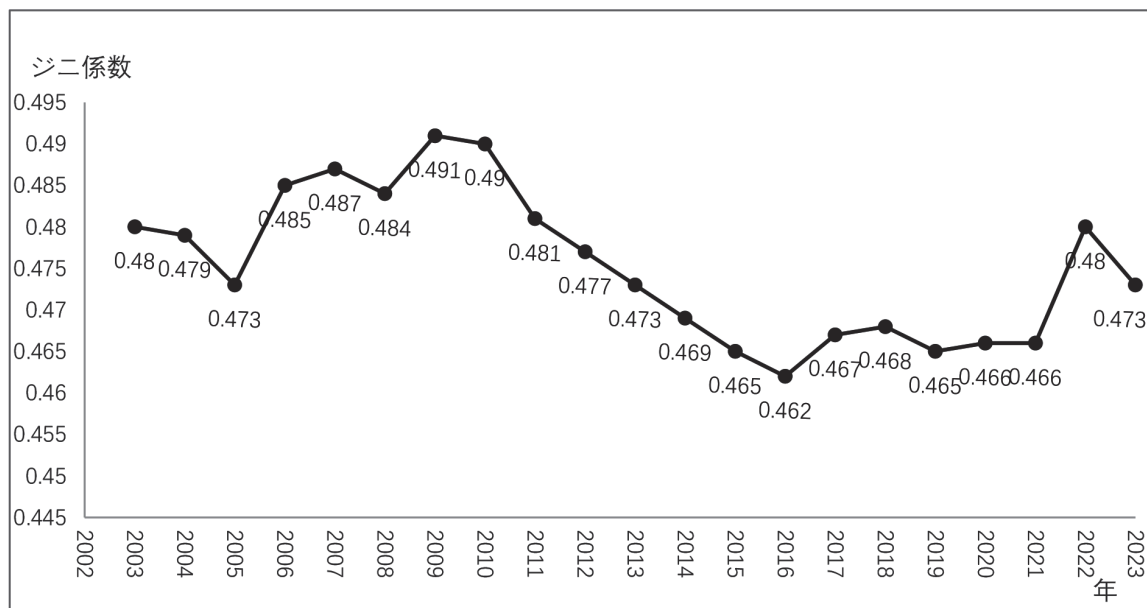


図1：2003年－2022年中国のジニ係数

出典：中国国家統計局（2023）より筆者作成

I. 3. 2 地域格差問題

中国における地域間の経済発展格差も重要な課題である。東部沿海地域は先進的なインフラや産業基盤があり、高い収入水準と豊かな社会サービスを実現できている。一方で、中西部内陸地域は経済発展が遅れており、所得水準や雇用機会が著しく低い（NBS, 2023）。この地域間格差は、住民の幸福感にも影響を与えている。例えば、高所得地域の住民は豊かな公共サービスと生活の利便性を享受できる一方、低所得地域では都市化の遅れが若者の社会参加やキャリア形成に悪影響を与える可能性がある。本研究では、高所得地域と低所得地域における幸福感の違いとその要因についても分析する。

I. 4 中国における若者の心理健康問題

近年、中国の若者に対する心理健康問題が社会全体の課題として浮上している。中国科学院心理研究所が発表した「中国国民心理健康発展報告（2021-2022）」（図2）によれば、18～24歳の若者が最も高い心理的なリスクを抱える年齢層である。次いで25～34歳の層も高いリスクを示している。この傾向は、若者が社会構造や経済環境の急激な変化に適応する過程で、多くの心理的ストレスに直面していることを反映している（中国科学院、2022）。このように心理健康問題は多くの若者の生活に影響している。

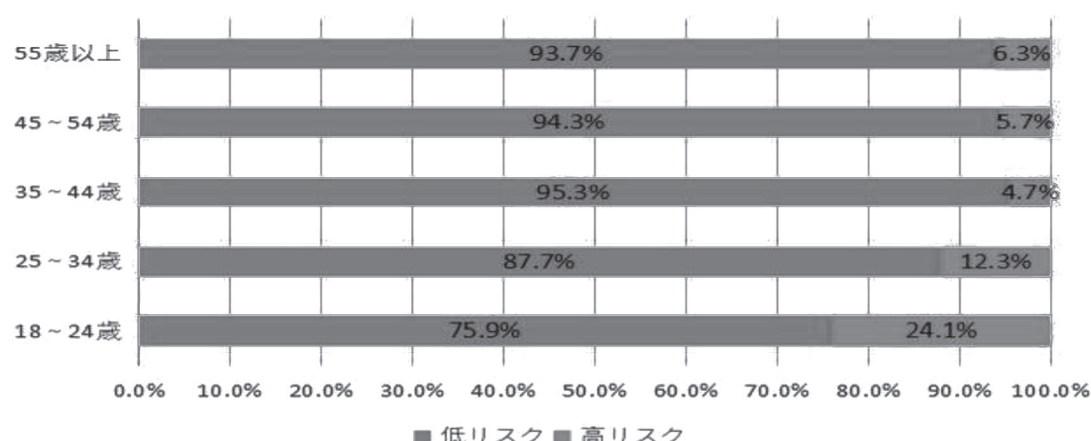


図2：中国における年齢とメンタルヘルスリスクの分布

出典：中国国民心理健康発展報告（2021-2022）より筆者作成

I. 5 研究課題と意義

ここまでの研究背景では、幸福度の定義、中国の経済格差や地域格差、若者の心理健康問題を取り巻く社会背景について概観した。特にWVSの先行調査では、家庭収入満足度や健康評価、政策満足度が幸福感に与える影響は顕著であった。ただし、現在の中国における社会問題の背景を考慮すると、経済格差がもたらす生活環境の違いや、精神的健康の問題が若者の幸福感に与える影響に注目する必要がある。

したがって、本研究では、これらの課題に対する新しいアンケートを作成し、詳細な分析を行うことで、幸福度の向上に寄与する要因を多角的に検討することを目的とする。特に、経済的格差と心理健康の問題に焦点を当て、若者の幸福感向上に向けた政策提言を行うことを目指す。

II. 幸福度に関する影響因子の整理と考え

II. 1 経済要因

Easterlin（1974）が提唱した「イースターリンの逆説」によれば、所得が一定の水準を超えると、幸福感の増加が停滞するとされている。また、姚（2022）では中国家庭追跡調査（CFPS）のデータを用いて、収入の増加や収入格差が住民の幸福感に与える影響につい

て分析されている。この研究によれば、収入の絶対的な増加が住民の主観的幸福感を高める一方、収入格差の拡大は幸福感を低下させる要因となっていることが示されている。

Ⅱ. 2 健康要因

健康は、幸福感に対する重要な決定要因である。特に、身体的健康と心理的健康が幸福感に及ぼす影響については多くの研究が行われている。例えば、Diener（1999）の研究は、身体的健康と主観的幸福感の関連性を明らかにした。これによると体が健康な人は、より高い幸福感を持つ傾向があることを示している。さらに、同研究では、不安や抑うつといった精神的健康の側面が幸福感に大きな影響を与えることも指摘されている。

一方、レジリエンス（心理的回復力）に着目した研究として、児玉ら（2020）が挙げられる。同研究では、ストレスやレジリエンスが幸福感に及ぼす影響を検討した結果、ストレスが高い状況下でも、レジリエンスが高い個人ほど幸福感を維持する能力が高いことが示されている。さらに、レジリエンスはストレスに対する心理的な防御壁として機能し、ポジティブな感情や自己効力感の強化を通じて幸福感を向上させる役割を果たすことも明らかにされている。

Ⅱ. 3 生活環境要因

劉（2021）は上海市浦東新区を事例に、地域環境要因が住民の主観的幸福感に与える影響を分析した。これにより、美観の整った地域環境や健康促進を目的とした施設、そして自然環境の充実が住民の幸福感を大きく向上させる要因として示されている。特に、自然環境や緑地の整備は日常生活の質を高めるだけでなく、住民のストレスを軽減し、幸福感を直接的に向上させる効果があるとされている。劉（2023）の研究も同様に、都市景観環境が住民の生活品質および幸福感に与える影響を検討している。自然景観や緑地空間の整備が住民の心理的健康を改善し、地域コミュニティの結束力を強化する重要な要因になると指摘している。これらの知見は、現代都市における自然環境整備の重要性を強調している。

Ⅱ. 4 仕事要因

仕事要因としては、労働時間や職場環境、人間関係などが幸福感に影響を及ぼすことが広く指摘されている。たとえば、労働政策研究・研修機構（2018）の報告では、中国の若者の就業環境の分析を通じて、就業競争の激化が若者のストレスを増大させ、メンタルヘルスの問題や幸福感的低下につながる可能性を示唆している。また、就職難や過度な労働環境が若年層の生活満足度を損なう要因であることも明らかになり、若者の働き方に配慮した労働政策の必要性を強調している。

一方、李（2020）は、若い従業員の仕事幸福感が多様な要因から影響を受けることを示している。具体的には仕事そのもの、人間関係、リーダーシップ管理、環境適応、給与や福利厚生、キャリアの展望などの要素が挙げられている。特に給与や福利厚生、キャリア

の展望が仕事幸福感に最も強い影響を及ぼすことを示唆している。

Ⅱ. 5 農村と都市における幸福度の相違

中国では、都市部と農村部の経済的・社会的格差が大きく、これにより住民の幸福感に影響を与える要因が地域ごとに異なることが指摘されている。例えば、2014年の中国労働力動態調査（CLDS）を基にした研究では、都市部住民の幸福感が農村部住民よりも高いことが示されている。この差異は主に生活水準や生活環境、生活リズムの違いが原因となっている。一方、農村部では公共サービスやインフラの不足が幸福感に影響を与える大きな要因となっている（顧、2021）。

Ⅱ. 6 欠如する中国の若者の幸福度に関する包括的・多面的な分析

幸福度に関する先行研究は、心理学、社会学、経済学など多様な分野で多くの知見を蓄積してきた。しかし、中国特有の社会背景や地域間格差の問題を考慮すると、いくつかの限界が存在する。まずは、中国における地域格差を考慮した幸福感研究が限定的な点が挙げられる。既存の研究では、都市部と農村部の幸福感の差異が指摘されているが、高所得地域と低所得地域における幸福感の要因構造の詳細な分析は不十分である。特に、農村部ではインフラ整備や公共サービスの不足が幸福感に与える影響が強調されるが、都市部ではストレスの多い労働環境や高い生活コストが幸福感にどのように影響しているかという点についてデータが不足している。本研究では都市部に焦点を当てる。都市部の若者は、多様な生活様式や価値観を持っており、生活ストレスが高いことから心理的健康問題が重要である。このような背景から、都市部の若者は幸福度研究に適した対象と言える。

次に、従来の研究では、経済的要因、健康要因、生活環境要因など、特定の領域に焦点を当てた分析が主流である。この3つの要因がどのように相互作用して幸福感を形成するかを明らかにする研究は少ない。幸福感は多面的な概念なので、経済的・健康的・社会的要因を統合的に分析する必要がある。

第三に、中国の社会的変化や若年層の幸福感に特化した研究がまだ十分に行われていないことである。急速な都市化や経済発展に伴い、若者の生活環境や労働環境は大きく変化しているが、これが幸福感に与える影響を検討した研究は少ない。また、若者の心理的健康問題や価値観の多様化が幸福感に及ぼす影響についても、さらに深い議論が求められる。これらの限界を克服するためには、幸福感に影響を与える要因を多面的かつ包括的に分析する必要がある。

Ⅲ. 研究方法

Ⅲ. 1 研究目的と仮説

本研究では、中国の若者における幸福度の低下という社会問題に注目する。特に、若者の心理的健康問題と地域間格差という社会背景を踏まえ、幸福度を改善することを目的としている。本研究の具体的な目的は以下の通りである。

目的 1 は所得別地域間での生活環境格差と幸福度の関係の解明である。これにより、地域間格差が若者の幸福度に与える影響を明らかにする。高所得地域と低所得地域における幸福感の違いとその要因の比較を通じて、地域間の経済格差が若者の幸福感に及ぼす影響の程度及び公共サービスの質、交通の利便性、安全性などの地域ごとの生活環境が幸福度に及ぼす影響の違いを解明する。そして、高所得地域と低所得地域では、幸福感の決定要因が異なる可能性があることから、以下の仮説を提起する：

仮説 1：高所得地域と低所得地域では幸福度に影響を与える生活環境に相違がある。

次に目的 2 では健康が幸福度に及ぼす影響を明らかにする。これは若者のメンタルヘルス問題に着目することで、健康要因が幸福感に果たす役割を解明するものである。特に健康が他の要因（経済的要因、仕事要因など）を介して幸福感に与える直接的・間接的な影響を分析する。具体的には、ストレスなどの心理的健康の問題が幸福感に与える影響及び健康的な生活習慣（運動、睡眠時間など）が幸福感に及ぼす役割とともに、健康要因が他の要因（経済的要因、仕事要因）を媒介して幸福感に与える間接効果を明らかにする。まとめると、若者のメンタルヘルス問題により、健康要因が幸福感に他の要因よりも大きな影響を与えると考えられる。特に心理的健康は他の要因を媒介して幸福感に間接的な影響を及ぼす可能性があることから、以下の仮説を提起する：

仮説 2-1：健康要因は経済的要因より幸福度への影響が大きい

仮説 2-2：健康要因は他の要因を介して幸福度に間接的な影響を与える。

本研究は幸福度に影響を与える経済的、健康的、社会的、地域的な要因を統合的に分析することで、若者の幸福度の向上をより深く理解することを目指している。そして、若者の幸福感を向上させるために政策提言を行うことを意図している。

Ⅲ. 2 データ収集

Ⅲ. 2. 1 調査対象

調査対象は、中国の都市部に居住する 18 歳から 29 歳までの若者である。これは、WVS の先行調査において、18 ～ 29 歳の年齢層が若年層を代表するカテゴリとして設定されていることから、今回のアンケートでも、この年齢層を調査対象とした。そして、本研究における都市部の定義は、国家統計局（2006）の分類に基づき、各地の市轄区および県級市の中心地区を対象としている。この分類は、経済活動の規模や生活基盤の充実度に基づいて、都市部と農村部を区別する標準的な基準である。

今回の調査では、地域を高所得地域と低所得地域に分類してデータを収集した。中国国家統計局（2024）によると、2023 年の全国の一人当たり可処分所得は 39,218 元である。この基準により、一人当たり年間所得がこの値を上回る省・市を高所得地域とし、低い省・市を低所得地域に分類する。これにより、各地域における幸福感の差異を詳細に分析することが可能になる。

Ⅲ. 2. 2 アンケート設計と変数の設定

幸福度に影響を与える多次元的要因を測定するために本調査のアンケートを設計した。具体的には、年齢、性別、学歴、居住地、宗教などの基本属性、幸福度（感情的幸福度、生活満足度、幸福感の頻度）や経済的要因（家庭収入満足度、月収満足度、貯蓄満足度）、健康要因（身体健康評価、心理健康評価、不安度、運動時間）、仕事要因（仕事満足度、仕事の各要素の満足度）、および生活環境要因（生活環境満足度、生活環境の各要素の満足度）に関するデータなどを収集した。また、回答の有効性を確認するため、「中国の首都はどこですか」という判別質問を設計し、無作為な回答を排除する工夫を行った。

目的1の所得別地域間比較では幸福度に影響を与える要因を分析するために、従属変数、独立変数を以下のように設定した。従属変数の幸福度として「感情的な幸福感評価」を設定した。幸福度の測定に際しては、主に感情的な幸福感を対象とし、5段階のリッカート尺度（1＝全然幸福ではない、5＝非常に幸福）を用いた。独立変数は居住環境全体の満足度、住宅の広さと快適性、交通の利便性、治安の良さ、自然環境の豊かさ、公共施設とサービスの利用可能性、騒音や空気の質、地域活動の8項目を設定し、同様にリッカート尺度で評価した。

一方、目的2の健康が幸福度に及ぼす影響を明らかにするため、構造方程式モデリング（SEM）のモデルでは、幸福度を「感情的な幸福感評価」・「生活満足度」・「主観的幸福感」の3つの次元に分割し、いずれも同様の5段階リッカート尺度によって評価を行った。独立変数としては、経済的要因・健康要因・生活環境要因・仕事要因を設定した。経済的要因には、家庭収入、家庭収入満足度、月収満足度、貯蓄満足度を含めている。健康要因は、身体的健康評価、心理的健康評価、収入や健康、生活環境、仕事、家庭などに対するストレスの程度と毎週の運動時間を測定項目として設定した。生活環境要因は、交通の利便性、治安や安全性、自然環境の豊かさ、住宅の快適性、公共施設の利便性、騒音や空気の質に対する満足度、および地域活動への満足度を取り入れている。また、仕事要因は、職場環境、労働時間、仕事の雰囲気、人間関係、仕事の達成感、給与に対する満足度などの測定項目を設定した。これも、幸福度と同じように5段階リッカート尺度によって評価を行った。

Ⅲ. 2. 3 データ収集方法

アンケートは、中国全土で調査を実施できるウェブ調査会社（倍研通データテクノロジー株式会社）を通じて実施した。この調査会社は、広範なオンラインプラットフォームを活用し、多様な背景を持つ若者から効率的にデータを収集することができる。しかし、WVSの先行調査では政策満足度が幸福感に影響を与えることが示されているが、今回の調査では調査会社の制約により、政府の政策に関する直接的な質問を含めることができなかった。

今回の調査は、2023年10月3日から10月20日までの期間にオンラインで実施され、2,850部の調査票を配布した。最終的に723部の回答が回収され、そのうち有効回答数は706部であり、回答率は25.3%であった。調査対象となった706人の回答者は、性別、年齢、地域、生活環境など多様な背景を持つ人々である。回答者の年齢層は18歳から29歳

までで、各年齢層がバランスよく分布している。本研究において、Cronbach の α 値は 0.918 という結果が得られた。この値は非常に高い信頼性を示しており、調査項目が一貫性を持っていることを意味する。そして、本研究における KMO 値は 0.933 であり、これは非常に高い適合性を示している。この結果は、データ間の相関が十分に強く、因子分析に適していることを意味している。

Ⅲ. 3 分析手法

本研究では、データを分析する際、研究目的 1 を検証するために独立サンプル t 検定と線形回帰分析を実施した。研究目的 2 では SEM を適用した。

Ⅳ. 所得別地域と幸福度影響因子の関係

Ⅳ. 1 生活環境満足度の地域間比較

高所得地域と低所得地域間における生活環境満足度の違いを検証するため、t 検定を用いて分析した（表 4）。その結果、幸福度および生活環境に関連する各要素において、低所得地域（ $n=379$ ）と高所得地域（ $n=327$ ）の平均値には有意な差が確認できなかった（ $p>0.05$ ）。これは、所得地域の違いは生活環境満足度に対して大きな影響を及ぼしていないことを示唆している。

表 4：t 検定による所得別地域の幸福度と生活環境満足度の比較結果

	地域(平均値±標準誤差)		<i>t</i>	<i>p</i>
	低所得地域 ($n=379$)	高所得地域 ($n=327$)		
9、感情的な幸福感評価	3.34±1.10	3.33±1.14	0.057	0.955
22、居住環境満足度	3.43±1.13	3.30±1.13	1.595	0.111
23.1 住宅の広さと快適性	3.42±1.11	3.28±1.15	1.697	0.090
23.2 交通の利便性	3.40±1.12	3.27±1.13	1.559	0.119
23.3 治安の良さ	3.38±1.11	3.31±1.18	0.855	0.393
23.4 自然環境の豊かさ	3.33±1.12	3.35±1.11	-0.295	0.768
23.5 公共施設とサービスの利用可能性	3.36±1.14	3.32±1.16	0.434	0.664
23.6 騒音と空気の質	3.36±1.14	3.33±1.13	0.297	0.767
23.7 地域活動	3.39±1.13	3.24±1.20	1.700	0.090

備考：* $p<0.05$ 、** $p<0.01$

Ⅳ. 2 感情的幸福度に影響する高所得地域の交通利便性と治安

生活環境の要素が個人の幸福感に及ぼす影響をより詳細に分析するために、本研究では高所得地域と低所得地域に分けて線形回帰分析を実施した。その結果、低所得地域（表 5）では、モデル全体の説明力は低く（調整済み $R^2=0.073$ ）、いずれの説明変数も幸福度に対して統計的に有意な影響を与えていないことが確認された（ $p>0.05$ ）。この結果は、低所得地域において生活環境要素が幸福度に直接的な影響を与えていない可能性を示唆している。

表 5：低所得地域の回帰分析結果（ $n=379$ ）

	非標準係数		標準係数		共分散診断		
	標準誤差			<i>t</i>	<i>p</i>	標準誤差	
	<i>B</i>		<i>Beta</i>			<i>B</i>	
定数	2.104	0.213	—	9.8770	0.000**	—	—
22、居住環境満足度	0.108	0.073	0.111	1.485	0.138	2.295	0.436
23.1 住宅の広さと快適性	0.002	0.072	0.002	0.024	0.981	2.154	0.464
23.2 交通の利便性	0.049	0.075	0.050	0.646	0.518	2.414	0.414
23.3 治安の良さ	0.030	0.068	0.030	0.442	0.658	1.928	0.519
23.4 自然環境の豊かさ	0.032	0.068	0.032	0.466	0.642	1.985	0.504
23.5 公共施設とサービスの利用可能性	0.079	0.071	0.082	1.110	0.268	2.214	0.452
23.6 騒音と空気の質	0.019	0.070	0.020	0.275	0.784	2.188	0.457
23.7 地域活動	0.045	0.069	0.046	0.653	0.514	2.069	0.483
<i>R</i> ²				0.093			
調整済 <i>R</i> ²				0.073			
<i>F</i>				<i>F</i> (8, 370)=4.740, <i>p</i> =0.000			
D-W 値				1.950			

備考：従属変数 = 9、感情的な幸福感評価、* $p<0.05$ 、** $p<0.01$

高所得地域（表 6）では、交通の利便性と治安の良さが幸福度に有意な正の影響を与えることが示された。モデルの回帰式は以下の通りである：

$$\text{感情的幸福度} = 1.809 + 0.206* \text{交通の利便性} + 0.160* \text{治安の良さ}$$

また、公共施設とサービスの利用可能性も有意水準に近い結果を示し、幸福度への一定の影響が考えられる。モデルの説明力は調整済み $R^2=0.138$ であり、低所得地域のモデルと比較して高いことが示されている。

これらの結果を総合すると、高所得都市部では交通の利便性や治安の良さが幸福度において重要な役割を果たしていることが明らかとなった。一方で、低所得都市部ではいずれの生活環境要素も幸福度に有意な影響を与えていないことが示唆された。

表 6：高所得地域の回帰分析結果 ($n=327$)

	非標準係数		標準係数		t	p	共分散診断	
	B	標準誤差	$Beta$				B	標準誤差
定数	1.809	0.224	—		8.058	0.000**	—	—
22、居住環境満足度	0.029	0.075	0.029		0.385	0.701	2.089	0.479
23.1 住宅の広さと快適性	-0.023	0.073	-0.023		-0.309	0.757	2.055	0.487
23.2 交通の利便性	0.209	0.079	0.206		2.635	0.009**	2.313	0.432
23.3 治安の良さ	0.155	0.072	0.160		2.157	0.032*	2.074	0.482
23.4 自然環境の豊かさ	0.020	0.075	0.019		0.268	0.789	1.992	0.502
23.5 公共施設とサービスの利用可能性	0.152	0.079	0.155		1.918	0.056	2.460	0.407
23.6 騒音と空気の質	-0.023	0.074	-0.023		-0.315	0.753	2.025	0.494
23.7 地域活動	-0.058	0.076	-0.060		-0.761	0.447	2.374	0.421
R^2	0.159							
調整済み R^2	0.138							
F	$F(8, 318)=7.496, p=0.000$							
D-W 値	1.891							

備考：従属変数=9、感情的な幸福感評価、* $p<0.05$ 、** $p<0.01$

IV. 3 考察：地域格差が幸福度に与える影響の解釈

本研究の目的1「所得別地域間での生活環境格差と幸福度の関係の解明」に関連する地域別回帰分析の結果に基づき、高所得都市部における交通の利便性と治安の良さが幸福度に有意な正の影響を与えており、低所得都市部ではいずれの生活環境要素も幸福度に対して統計的に有意な影響を示さなかった。これにより、仮説1「高所得地域と低所得地域では幸福度に影響を与える生活環境に相違がある」は支持され、目的1が達成された。

以上より、まず所得別地域間の生活環境全般における満足度の水準が概ね同程度であることが明らかになった。また、高所得地域と低所得地域の間で幸福度に影響を与える生活環境要因が異なるという結果は、地域特性を考慮した政策の重要性を示唆している。具体的には、高所得地域では都市インフラや治安の改善が幸福感向上に寄与すると考えられる。

V. 健康が幸福度に及ぼす影響の検定

V. 1 大きな相違がない WVS 調査と本調査結果

本調査の結果を WVS 先行調査の結果と比較するため、回帰分析を実施した。被説明変数は Q9：感情的な幸福度に設定した。一方、説明変数は WVS 先行調査における「体の健康レベルと」と比較するため、Q16「身体的な健康評価」を設定した。この変数は、自分の健康状態をどのように認識しているかを測定するものである。1 から 5 までのスコアで評価し、「1」は「とても不健康」、「5」は「とても健康」を示す。また Q12「家庭収入満足度」も説明変数として採用し、家庭収入の満足感を 1 から 5 までのスコアで評価し、「1」は「全く満足ではない」、「5」は「とても満足」を示す。これは家計の経済的な満足感を反映する。さらに、個人要素として学歴、性別、婚姻状況、宗教信仰重視度も説明変数に含め、より多角的な分析を行った。なお、先行調査では政府満足度も幸福度に有意な影響を与えているとされるが、今回の調査においては既述の通り含めることができなかった。

表 7：幸福度に対する影響因子回帰分析結果 (n=706)

	非標準係数		標準係数	<i>t</i>	<i>p</i>	共分散診断	
	<i>B</i>	標準誤差	<i>Beta</i>			<i>B</i>	標準誤差
定数	1.975	0.277	—	7.118	0.000**	—	—
12、家庭収入満足度	0.237	0.035	0.246	6.779	0.000**	1.070	0.935
16、身体的な健康評価	0.222	0.036	0.225	6.216	0.000**	1.068	0.936
3、学歴	0.044	0.032	0.048	1.371	0.171	1.006	0.994
4、性別	−0.043	0.079	−0.019	−0.545	0.586	1.012	0.988
5、婚姻状況	−0.097	0.080	−0.043	−1.216	0.225	1.007	0.993
6、宗教	−0.091	0.080	−0.040	−1.134	0.257	1.009	0.991
<i>R</i> ²				0.142			
調整済 <i>R</i> ²				0.134			
<i>F</i>				<i>F</i> (6, 699)=19.244, <i>p</i> =0.000			
D-W 値				1.928			

備考：従属変数 = 9、感情的な幸福感評価、**p* < 0.05、***p* < 0.01

その結果、健康評価と家庭収入満足度が幸福度に最も大きな影響を与えることが示された（表 7）。モデルの回帰式は以下の通りである：

$$\text{感情的な幸福度} = 2.171 + 0.237 * \text{家庭収入満足度} + 0.222 * \text{身体的な健康評価}$$

健康評価の標準化回帰係数は 0.225、家庭収入満足度の標準化回帰係数は 0.246 と、先行調査の結果（健康評価の標準化回帰係数が 0.183、家庭収入満足度が 0.225）と比較して、係数が少し上昇していることが確認された。一方、性別、学歴、婚姻状況、宗教信仰などの個人要因については有意な影響が見られなかった。これらの結果から、健康状態と経済的安定が都市部における若者の幸福度に関する主要な決定要因であり、個人の背景要因よりも幸福感に与える影響が強いことが示唆される。また、WVS 先行調査の結果と比較すると、健康と収入の影響力がさらに高まっていることが示されており、中国都市部に居住する若者については、これらの要因に対する依存度が増していると考えられる。総じて、本研究の結果は、若者の幸福感において健康と経済的安定が不可欠な要素であることを改めて確認するとともに、これらの要因の重要性が WVS 先行調査よりも高まっていることを示す結果となった。

V. 2 構造方程式モデリング分析

V. 2.1 SEM モデルの図と適合性評価

目的 2 について、SEM を用いて経済的要因、健康要因、生活環境要因、仕事要因が幸福度に与える直接的および間接的な影響を包括的に分析した。SEM モデルの分析結果は以下の図 3 の通りである。

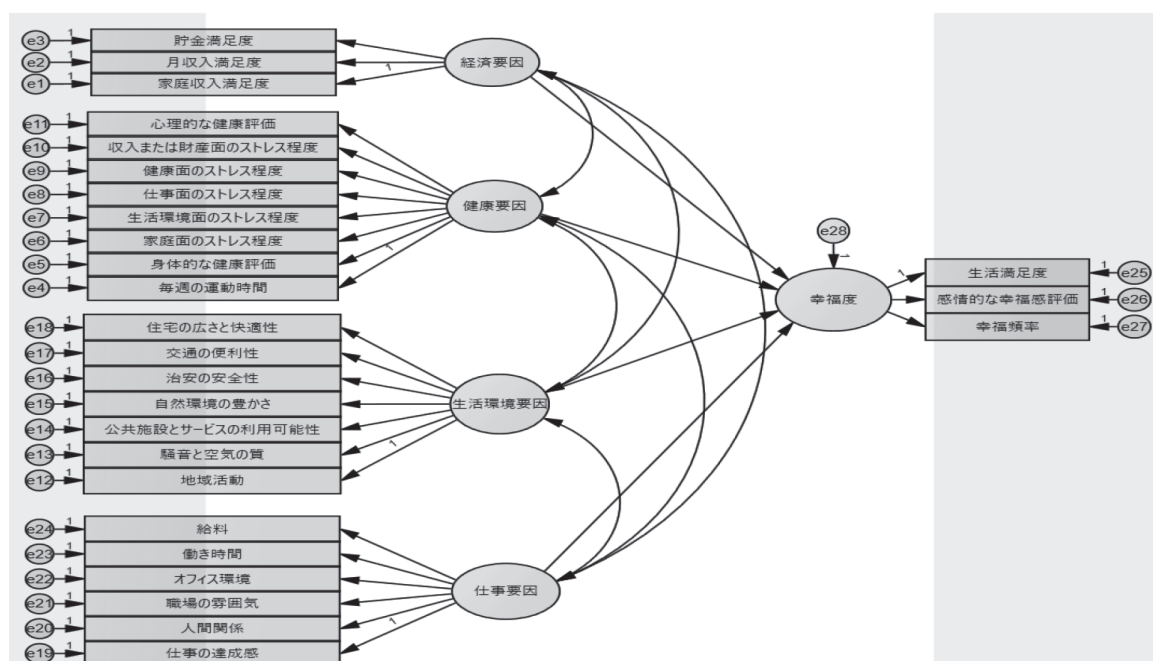


図 3：幸福度影響要因に関する SEM モデル図

SEMモデルの適合性を評価する主要な指標として、CFIは0.980、RMSEAは0.030、GFIは0.946、RMRは0.037という値が得られた（表8）。この結果から、SEMモデルは幸福度に影響を与える要因の複雑な相互作用を正確に反映しており、設計された因子構造が妥当であることが統計的に支持された。

表8：幸福度影響要因に関するSEMモデル適合性の指標

指標	χ^2	df	p	χ^2/df	GFI	RMSEA	RMR	CFI	NFI	NNFI
判断基準	-	-	>0.05	<3	>0.9	<0.10	<0.05	>0.9	>0.9	>0.9
値	506.138	308	0.000	1.643	0.946	0.030	0.037	0.980	0.951	0.977

指標	TLI	AGFI	IFI	PGFI	PNFI	PCFI	SRMR	RMSEA	90% CI
判断基準	>0.9	>0.9	>0.9	>0.5	>0.5	>0.5	<0.1	-	-
値	0.977	0.934	0.980	0.771	0.834	0.860	0.028	0.025	~ 0.035

備考：Default Model の時 $\chi^2(351)=10309.972$ 、 $p=1.000$ 。AIC=138.566、BIC=457.739

V. 2. 2 幸福度に影響する4つの主要因

SEMモデルの分析結果に基づき、経済的要因、健康要因、生活環境要因、仕事要因も幸福度に有意な影響を与えており、幸福度は複数の要因によって多次的に構成されていることが明らかになった（表9）。具体的には、経済的要因 → 幸福度のパス係数は0.268、健康要因 → 幸福度は0.142、生活環境要因 → 幸福度は0.138、仕事要因 → 幸福度は0.215という結果が得られた。これらの結果から、経済的要因が幸福度に対して最も大きな影響を及ぼすことが確認された。このため、仮説2-1「健康要因は経済的要因より幸福度への影響が大きい」は支持されなかった。経済的要因の影響が他の要因よりも高いことが示されており、幸福度の形成における経済の重要性が再確認された。

表9：幸福度影響要因SEMモデルに関する回帰係数表

X	→	Y	非標準係数	SE	z (CR 値)	p	標準係数
経済的要因	→	幸福度	0.242	0.048	5.073	0.000	0.268
健康要因	→	幸福度	0.139	0.048	2.910	0.004	0.142
生活環境要因	→	幸福度	0.136	0.048	2.814	0.005	0.138
仕事要因	→	幸福度	0.206	0.048	4.339	0.000	0.215
幸福度	→	10、幸福頻率	1.002	0.059	17.130	0.000	0.749
幸福度	→	9、感情的な幸福感評価	1.015	0.059	17.293	0.000	0.762

幸福度	→	8、生活満足度	1.000	-	-	-	0.748
経済的要因	→	15、貯金満足度	0.936	0.05018.6070.000			0.753
経済的要因	→	14、月收入満足度	0.919	0.04918.5640.000			0.751
経済的要因	→	12、家庭収入満足度	1.000	-	-	-	0.802
健康要因	→	19、毎週の運動時間	0.602	0.05311.2940.000			0.435
健康要因	→	18.5 家庭面のストレス程度	1.025	0.04920.8850.000			0.770
健康要因	→	18.4 生活環境面のストレス程度	0.982	0.04920.1470.000			0.746
健康要因	→	18.3 仕事面のストレス程度	1.096	0.05021.8950.000			0.803
健康要因	→	18.2 健康面のストレス程度	0.988	0.04820.4250.000			0.755
健康要因	→	18.1 収入または財産面の ストレス程度	1.095	0.05021.8180.000			0.801
健康要因	→	17、心理的な健康評価	0.968	0.04820.1250.000			0.745
健康要因	→	16、身体的な健康評価	1.000	-	-	-	0.755
生活環境要因	→	23.6 騒音と空気の質	0.994	0.05020.0300.000			0.745
生活環境要因	→	23.5 公共施設とサービスの利用 可能性	1.067	0.05021.3850.000			0.790
生活環境要因	→	23.4 自然環境の豊かさ	0.956	0.04919.5450.000			0.729
生活環境要因	→	23.3 治安の良さ	0.990	0.05019.8450.000			0.739
生活環境要因	→	23.2 交通の利便性	1.023	0.04920.9240.000			0.775
生活環境要因	→	23.1 住宅の広さと快適性	1.000	-	-	-	0.756
生活環境要因	→	23.7 地域活動	1.050	0.05120.7940.000			0.771
仕事要因	→	26.6 仕事の達成感	1.059	0.05120.9620.000			0.776
仕事要因	→	26.5 人間関係	1.063	0.04921.5880.000			0.796
仕事要因	→	26.4 職場の雰囲気	1.015	0.04920.8320.000			0.772
仕事要因	→	26.3 オフィス環境	1.022	0.04920.6810.000			0.767
仕事要因	→	26.2 労働時間	1.046	0.05021.0620.000			0.779
仕事要因	→	26.1 給料	1.000	-	-	-	0.759

備考：→は回帰効果または測定関係を表す。

V. 2. 3 要因間の相互関係

本研究では、健康要因が経済的要因、生活環境要因、仕事要因と有意な相関を示すことが確認された。分散表（表 10）では、各要因間のパス係数が詳細に示されている。経済的要因から健康要因へのパス係数は、標準係数で 0.448 と高い値を示しており、経済的満足感が健康状態に直接的な影響を及ぼしていることがわかった。また、経済的要因が生活環境要因に与えるパス係数は標準係数で 0.449 を示し、経済的満足感が居住環境やインフラの質に強く影響していることを示唆している。そして、健康要因は、生活環境要因（標準係数 = 0.476）や仕事要因（標準係数 = 0.455）に高い影響力を示しており、健康状態が個人の生活や職場環境に大きな影響を与えることが確認された。さらに、仕事要因は経済的要因（標準係数 = 0.461）や健康要因（標準係数 = 0.455）と有意な関連性を持っている。

これらの結果から、健康要因が幸福度に与える影響は、他の要因との相互作用を通じた間接的な影響を含むことが示された。幸福度の形成は単一の要因ではなく、経済的要因、健康要因、生活環境要因、仕事要因のような複数の要因が互いに影響し、多次的に構成されていることがわかった。この点から、仮説 2-2「健康要因は他の要因を介して幸福度に間接的な影響を与える。」は支持された。特に、健康状態の向上が生活環境や職場環境を通じて幸福度に間接的な影響を与える可能性が確認され、これらの結果は幸福度向上を目指す施策や介入策において、健康要因の重要性を再認識させるものである。

表 10：幸福度影響要因 SEM モデルに関する分散表

X	Y	<i>z</i>	<i>p</i>	標準係数 (Std. Estimate)
経済的要因	健康要因	17.759	0.000	0.448
経済的要因	生活環境要因	17.725	0.000	0.449
経済的要因	仕事要因	18.082	0.000	0.461
健康要因	経済的要因	17.759	0.000	0.448
健康要因	生活環境要因	19.000	0.000	0.476
健康要因	仕事要因	18.399	0.000	0.455
生活環境要因	経済的要因	17.725	0.000	0.449
生活環境要因	健康要因	19.000	0.000	0.476
生活環境要因	仕事要因	18.402	0.000	0.456
仕事要因	経済的要因	18.082	0.000	0.461
仕事要因	健康要因	18.399	0.000	0.455
仕事要因	生活環境要因	18.402	0.000	0.456

V. 3 健康要因の間接的・直接的影響

本章では、SEM 分析を通じて幸福度に影響を与える主要因を明らかにした。経済的要因、健康要因、生活環境要因、仕事要因のいずれも、幸福度に対して有意な影響を与える決定要因であることが確認された。特に、経済的要因が幸福度に与える直接的な影響が最も大きく、経済的満足感が幸福感の形成において中心的な役割を果たすことが示された。

さらに、本研究は健康要因が幸福度形成において中心的な媒介役割を果たしていることを明らかにした。経済的要因、生活環境要因、仕事要因が幸福度に与える間接的な影響は、健康要因を介して強化されていることが確認された。例えば、経済的要因が健康要因を介して幸福度に及ぼす間接効果や、仕事要因が健康要因を通じて幸福度に与える影響は、健康が幸福度形成において不可欠な役割を果たしていることを示している。

これらの結果は、幸福度が単一の要因ではなく、多次元的な構造によって決定されることを示している。経済的要因は直接的に幸福度に最も強く影響を与える一方で、健康要因は直接的だけでなく、他の要因の影響を媒介し、間接的に幸福感を高めている。さらに、生活環境要因や仕事要因も重要な役割を果たしており、これらの要因が互いに作用しながら幸福度の形成に寄与していることが示唆された。

VI. 結論

VI. 1 本研究のまとめ

本研究は、近年大きな社会問題を抱えている中国の若者を対象とし、高所得地域と低所得地域の比較分析により、幸福度に影響を及ぼす要因に明確な違いが確認された。高所得地域では交通の利便性や治安の良さといった生活環境要因が幸福度に強く影響を及ぼしている。一方で、低所得地域ではこれらの要因の影響が限定的である。さらに、幸福度に影響を与える要因を多次元的に統合し、SEM を用いて、中国都市部の若者の幸福度に影響を与える 4 つの要因（経済、健康、生活環境、仕事）を分析した。その結果、これらすべての要因が幸福度に有意な影響を与えることが確認された。特に、経済的要因と仕事要因が幸福度に最も強い影響を及ぼしており、続いて健康要因および生活環境要因が幸福度を構成する重要な要素であることが明らかとなった。また、健康が幸福度に対して直接的な影響だけでなく、他の要因を介して重要な役割を果たしていることを示した。特に、現代のストレスフルな社会において、心理的および身体的健康の維持が若者の幸福感向上において不可欠であることが示唆された。

本研究の結果は、幸福度が単一の要因ではなく、多次元的な構造によって決定されることを示している。経済的要因は直接的に幸福度に影響を与える一方で、健康要因は他の要因の影響を媒介し、間接的に幸福度を高めている。また、高所得地域と低所得地域の間で幸福度に影響を与える要因が異なるという結果は、地域特性を考慮した政策立案の必要性を示唆している。具体的には、高所得地域ではインフラ整備や治安改善が、全地域でメンタルヘルスへの支援が若者の幸福感向上のために優先すべき課題となっている。

VI. 2 本研究の新規性

本研究では、高所得地域と低所得地域における幸福度決定要因の違いを明らかにしたことで、地域特性と幸福度の関連を議論した既存研究を補完する重要な知見を提供した。特に、高所得地域では交通の利便性や治安の良さが幸福度に強く影響を与えていた。この結果は、地域ごとに異なる政策的アプローチが必要であることを示唆しており、先行研究における幸福度向上策への視点を支持すると言える。

また、若者のメンタルヘルス問題と格差問題を背景に、中国都市部に焦点を当てたモデルを構築し、多次元的な要因が幸福度にどのような影響を与えるのかを総合的に検討した。SEMを活用することで、健康要因が経済、仕事や生活環境要因を介して間接的に幸福度に影響を及ぼすことを示した。これは、先行研究における幸福感の決定要因に関する議論をさらに深めるものである。この間接効果に関する検証により、幸福度が多次元のかつ相互作用的な構造に基づいて形成されることを示した。また、先行研究との比較から、若者が重視する幸福度の決定要因（経済的満足度や健康など）は大きく変化しておらず、社会環境の変化にもかかわらず、これらの要因が幸福度に及ぼす影響は一貫していることが明らかになった。本研究の結果は、幸福度を構成する要因が地域や個人の状況によって異なるだけでなく、それらが相互に影響を及ぼし合う複雑なネットワークによって決定されることを示している。

VI. 3 本研究の課題

本研究では、一部の項目の回答において信頼性や妥当性が十分に確認できなかったため、それらを定量分析に含めることができなかった。これにより、具体的な収入格差や所得の不平等が幸福度に与える影響を詳細に比較・分析することができなかった。また、調査対象が都市部の若者に限定されているため、農村部の若者の幸福度に関する検討ができていない点も課題として挙げられる。農村部では社会資源の不足や文化的背景の違いが幸福度に大きな影響を及ぼす可能性があり、それらを適切に反映した分析モデルが必要である。

さらに、スマートフォンやSNSの普及による生活様式や人間関係の変化が、若者の幸福度に与える影響についても本研究では考慮できていない。例えば、SNSを通じた社会的比較や過度なオンライン活動が幸福感を低下させる一方で、情報共有や交流機会の増加がポジティブな効果をもたらす可能性がある。これらのデジタル化の影響は、若者の幸福度を多面的に理解する上で重要な要素であり、今後の研究課題である。また、先行研究では政府満足度が幸福度に有意な影響を与えることが指摘されているが、今回の調査では調査会社側の制約により、政府の政策に関する直接的な質問を含めることができなかった点も限界として挙げられる。

[参考文献]

Blanchflower, D. G. & Graham, C., “The U-shaped Happiness Curve: Theories and Implications,” *Journal of Economic Perspectives*, 34(4), 2020, pp. 95–114. <https://doi.org/10.1257/jep.34.4.95>

- Diener, E., Oishi, S. & Lucas, R. E., “Subjective well-being: Three decades of progress,” *Psychological Bulletin*, 125(2), 1999, pp. 276–302. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.125.2.276>
- Diener, E., Oishi, S. & Lucas, R. E., “Personality, culture, and subjective well-being: Emotional and cognitive evaluations of life,” *Annual Review of Psychology*, 54, 2003, pp. 403–425. <https://doi.org/10.1146/annurev.psych.54.101601.145056>
- Easterlin, R. A., “Does economic growth improve the human lot? Some empirical evidence,” in P. A. David & M. W. Reder (Eds.), *Nations and households in economic growth: Essays in honor of Moses Abramovitz*, Academic Press, 1974, pp. 89–125.
- Helliwell, J. F., Layard, R., Sachs, J. D. & De Neve, J.-E., eds., *World Happiness Report 2018*, Sustainable Development Solutions Network, 2018.
- Helliwell, J. F., Layard, R., Sachs, J. D. & De Neve, J.-E., eds., *World Happiness Report 2020*, Sustainable Development Solutions Network, 2020.
- Hu, L. T. & Bentler, P. M., “Cutoff criteria for fit indexes in covariance structure analysis: Conventional criteria versus new alternatives,” *Structural Equation Modeling: A Multidisciplinary Journal*, 6(1), 1999, pp. 1–55.
- Peiró, J. M. & De Witte, H., “Moderating effects of job insecurity in the relationship between workload and work-related well-being,” *European Journal of Work and Organizational Psychology*, 17(2), 2008, pp. 155–177. <https://doi.org/10.1080/13594320701770635>
- Rgyle, M. & Hills, P., “The Oxford Happiness Questionnaire: A compact scale for the measurement of psychological well-being,” *Personality and Individual Differences*, 33(7), 2002, pp. 1073–1082. [https://doi.org/10.1016/S0191-8869\(01\)00213-6](https://doi.org/10.1016/S0191-8869(01)00213-6)
- WVS. World Values Survey: Official Aggregate.2022 <https://www.worldvaluessurvey.org>
- NBS（国家統計局）. *Statistical Communiqué of the People’s Republic of China on the 2022 National Economic and Social Development*, 2023.
<http://www.stats.gov.cn/>
- Wang, T. The Impact of Income and Health on Residents’ Happiness—Data Study Based on CGSS2017, 2023.
<https://www.hanspub.org/journal/PaperInformation?paperID=70299&utm>
- NBS（国家統計局）. *China Statistical Yearbook*, 2024.
<http://www.stats.gov.cn/>
- 岡田謙介、「心理学と心理測定における信頼性について：Cronbach の α 係数とは何なのか、何でないのか」、『教育心理学年報』、54、2015 年、71-83 頁。 https://www.jstage.jst.go.jp/article/arepj/54/0/54_71/_pdf
- 近藤克則、「社会経済格差による生活習慣課題への対応方策立案に向けた社会福祉・疫学的研究」、2021 年。 https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/download_pdf/2020/202009005A.pdf?utm
- 佐藤一磨、子どもと幸福度—子どもを持つことによって、幸福度は高まるのか—。慶應義塾大学経済研究所、2021 年。
<https://www.pdrc.keio.ac.jp/publications/dp/7094/>

- 児玉恵美、& 辻隆司、ストレスおよびレジリエンスが幸福感に及ぼす影響。『健康科学研究』、3(2)、39-49、2020 年。
<https://cir.nii.ac.jp/crid/1050002212668196224>
- 劉曉曦、「地域環境要因が住民の主観的幸福感に与える影響：上海市浦東新区を例に」、『環境と健康研究』、2021 年。<https://www.jecom.org/cn/article/pdf/preview/10.11836/JEOM21533.pdf>
- 劉林林、「都市景観環境が住民の生活品質に与える影響の研究」、『中国都市計画学会』、2023 年。<https://constru.com.cn/index.php/lbd-2-11-4086>
- 李晋、& 韓艷旗、「新生代従業員の仕事幸福感に影響を与える要因に関する研究」、『現代産業研究』、2020 年。<https://www.xdsyzzs.com/renliziyuan/5971.html>
- 孫艷偉、「職業幸福感の研究：最新のレビューと新しい視点」、『現代心理研究』、2020 年。
<https://www.hanspub.org/journal/PaperInformation?paperID=36490>
- 高子茗、& 呂洋、「『静寂』を求めて：騒音汚染と住民の幸福感」、『環境経済研究』、2023 年。<https://d.wanfangdata.com.cn/periodical/sxcjdxxb202305002>
- 顧楚丹、王豊竜、& 羅峰、中国都市部と農村部における幸福感の差異とその影響要因。『上海交通大学持続可能開発研究』、2021 年。
<https://sjdlyj.ecnu.edu.cn/CN/10.3969/j.issn.1004-9479.2021.01.2019690>
- 張再生、「宗教信仰、社会支持与居民幸福感的关系研究」、『期刊网』、2018 年。<https://qikan.cqvip.com/Qikan/Article/Detail?id=7000675753>
- 田柳、李玉梅、& 冯敬宇、「中国居民主観的幸福感及びその分布の変化傾向——中国における幸福パラドックスの存在について」、『労働経済研究』、12(6)、2024 年、70-100 頁。
<https://sle.ajcass.com/Magazine/show/?id=97557> 田中里奈、「居住地域の特性が住民の主観的幸福感に与える影響」、『農村計画学会誌』、32（特集号）、2013 年、167-180 頁。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/arp/32/Special_Issue/32_167/_pdf/-char/ja?utm_source=chatgpt.com
- 宮本光生、「空気質と住民の幸福感：CGSS（2015）の調査データに基づく実証研究」、『環境と社会科学』、2018 年。<https://wenku.baidu.com/view/f70340eea68da0116c175f0e7cd184254b351b30.html>
- 中川まり、「高学歴女性における幸福感と結婚」、『現代女性学研究』、2023 年。<https://otsuma.repo.nii.ac.jp/record/2000068/files/OKA59071.pdf>
- 中国科学院。（2022）.『中国国民心理健康發展報告（2021-2022）』[*Report on the Development of National Mental Health in China (2021-2022)*]. 中国科学院心理研究所、2022 年。
- 松島みどり、立福家、& 山内直、「現在の幸福度と将来への希望～幸福度指標の政策的活用～」、『内閣府経済社会総合研究所』、2013 年。https://www.esri.cao.go.jp/jp/esri/archive/new_wp/new_wp030/new_wp027.pdf
- 王豊竜、& 羅峰、「中国都市部と農村部における幸福感の差異とその影響要因」、『上海交通大学持続可能開発研究』、2021 年。<https://sjdlyj.ecnu.edu.cn/CN/10.3969/j.issn.1004-9479.2021.01.2019690>
- 吳玲平、「所得格差は家計の教育消費を拡大するか？ -CFPS 2014 年データに基づく実証分析。上海財經大學學報、2018 年、20(5): 100-111,

https://qks.sufe.edu.cn/mv_html/j00003/201805/e93ebb41-c829-4756-ad38-856df5b5f877_WEB.htm

Zhou, Y., 「医療が幸福度の男女差に与える影響」、2023 年。 <https://xianxiao.ssap.com.cn/catalog/4409477.htmls>

宗健、「結婚と子どもは幸福度を押し上げる」、『SO LAB』、2023 年。 https://www.so-lab.jp/pdf/contribution/fkrf_20230614_kekkon_kodomo_kofukudo_osiageru.pdf

The Study on the Influencing Factors of Youth Happiness in Urban Areas of China

Wenqiang Wang, Yusuke Toyoda

Abstract:

The level of urban development, living environment, income, and health all influence happiness, which generally follows a “U-shaped” curve, peaking in youth and old age while declining in middle age. However, the 2018 World Values Survey reported that young people in China exhibited the lowest levels of happiness. While previous studies have highlighted the impact of economic satisfaction, health, and living environment on happiness, there is a lack of analysis considering China's unique social structure. This study aimed to identify factors influencing the happiness of Chinese youth through a web-based survey targeting urban young people. First, a comparative analysis between high-income and low-income regions revealed differences in the factors influencing happiness. Furthermore, it was confirmed that economic, health, living environment, and work-related factors significantly affect happiness. Moreover, not only do economic and work-related factors have the strongest impact on happiness, but health also plays a crucial role, both through its direct effects on happiness and by influencing other factors.

Keywords: Happiness, The Youth, Urban China